

# 産官学連携推進 News Letter

Vol. 7

活動紹介

## 「関西10私大 機械&医療・福祉新技術説明会」にてシステム工学部浅田特任講師が発表

2026年2月26日(木)、JSTおよび本学を含む関西10私大主催の「関西10私大 材料&計測 2025年度新技術説明会」がオンラインで開催されました。この説明会の特長は、研究成果(特許)の実用化(技術移転)を目的に、新技術や産学連携に関心のある企業関係者に向けて、研究者(=発明者)自らがプレゼンテーションする点にあります。本学からは、システム工学部の浅田特任講師が登壇し、「ハンドル駆動式で日常生活動作(ADL)を支える新型車椅子」を紹介しました。本技術は、従来の車椅子に対しハンドルによって駆動させるとともに、操作部と身体との位置関係を工夫することで良好な姿勢での操作を可能にし、日常生活動作の維持・向上を図るものです。当日は、製造業をはじめ、官公庁・公的機関・大学・研究機関など、のべ200名以上(アーカイブ配信視聴者含む)が参加しました。発表資料とプレゼン動画は以下のサイトに掲載されています。

[https://shingi.jst.go.jp/list/list\\_2025/2025\\_10kansai.html](https://shingi.jst.go.jp/list/list_2025/2025_10kansai.html)



## 「MOBIOカフェ 産学連携セミナー」に情報デザイン学部 高井准教授が登壇

2026年3月12日(木)、クリエイション・コア東大阪にて「MOBIOカフェ 産学連携セミナー」が開催され、情報デザイン学部の高井准教授が登壇し、中小製造業が抱える技能継承に関する課題への取組みと、技術・技能継承システムについて紹介しました。技術継承の難しさや世代毎の価値観の違い、暗黙知の形式知化から情報機器を用いた生体計測に至るまで、具体的な事例やデータを用いて、丁寧かつわかりやすく説明しました。当日は、大阪市内および府下の製造業をはじめ、地方自治体、金融機関、経済・産業団体などから聴講されました。セミナー後には、参加企業からの技術相談を受け、現在は連携して研究を進めています。



## 知財勉強会(著作権法編)を開催しました(3月23日)

知的財産活性化の取組の一環として、2月に開催した特許法編に続き、今回は外部の専門家2名(弁護士・弁理士)を講師として招き、勉強会を開催しました。テーマは、「大学における著作権等の扱い、共同研究で発生する著作権の扱い」で、企業との共同研究や地域・自治体との連携において、とりわけ学生の取組成果の適切な保護・活用、さらに、SNSやAIに関する著作権の扱いについて、多くの事例を交えながら丁寧に解説いただきました。参加者からは、「本勉強会を通じて著作権法に対する理解や意識が高まった。教科書的なお話でなく実例を示していただいたことで理解が深まり身近な課題として捉えることができた。」との声が寄せられました。今後も現場の声を把握し、教員の意見も取り入れながら、大学全体としての著作権に対する意識のさらなる向上を図っていきます。



トピックス

## 新産業研究開発センター(HRC)1階の産学交流会議室が本格稼働しました

本会議室は、「まず来て、見て、話す」ことができる場として、学内研究者どうしの交流や学外の皆様との情報交換、研究成果の常時展示スペースとして整備されています。さらに、産学連携交流会や各種セミナー、ワークショップ等の開催拠点としてもご利用いただけます。企業・自治体との打合せ等でのご利用については、以下の利用案内をご参照ください。

【Webサイト】研究・社会連携\_\_支援組織、施設

<https://www.osaka-sandai.ac.jp/research/industry.html>



【利用シーン】学生による企業向け提案プレゼンテーションと、連携商品開発に向けたディスカッションの様子(経営・近藤ゼミ)



## <展示会>研究シーズの展開

2026年8月

イノベーションジャパン(大学見本市)での研究成果発表

2026年9月

第2回ラボ見学/研究交流会

2026年10月

CEATECでの研究成果発表

2026年11月

テクノメッセ東大阪展での研究成果発表

<お問い合わせ・相談>  
社会連携・研究推進センター  
産業研究所事務室  
sangaku@cnt.osaka-sandai.ac.jp

今後の予定

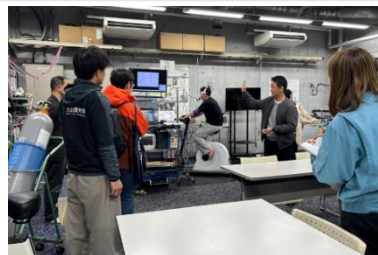
## 「第1回 学内研究交流会 & ラボ紹介・見学会」を開催 — 学部・分野を越えた交流が、新たな研究連携へ —

2026年3月25日(水)、新産業研究開発センターにおいて、学部・分野を横断した研究交流会およびラボ紹介・見学会を、本学で初めて開催しました。

本研究交流会・ラボ見学会は、各研究者が研究課題・保有技術・連携可能性を共有し、研究上の課題や困りごとの把握を通じて、新たな研究テーマや異分野連携の芽を育むきっかけとすることを目的とした取り組みです。当日は、6学部・大学院研究科から教員、大学院生・学部生あわせて18名が参加しました。

### 第1部 ラボ紹介・見学会

スポーツ健康学部・人間環境学研究科の宮本教授の研究室が保有する研究設備・装置を見学しました。実機の紹介に加え、研究室の学生による実演も行われ、現場体験型の内容が参加者から高い評価を得ました。



ラボ紹介・見学会の様子

### 第2部 研究交流会

教員による最新の研究紹介に加え、ポスターブースにおいて大学院生・学生も交えた異分野研究者同士の活発な意見交換が行われました。



研究交流会の様子

### 参加者の声

「異なる専門分野の研究者と直接交流し、じっくり意見交換することで、新たな着想や示唆を得ることができた」

「今後の研究展開につながる具体的なきっかけを得られた」

「学生を交えた共同実験や機器開発など、今後の連携の可能性が広がった」

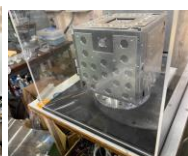
「単なる情報交換にとどまらず、研究の広がりや連携の可能性を実感できた」

### 具体的な成果 ～実施後アンケートより～

| 成果                   | アンケート振り返り                                           |
|----------------------|-----------------------------------------------------|
| 潜在的にあった交流ニーズの顕在化     | 参加目的として「他分野研究者との交流」が多かった                            |
| 内容・構成の完成度            | 全体満足度：「満足以上」が100%、ラボ見学：「有益以上」が100%、研究交流会：「有益以上」が91% |
| 単なる交流に留まらず、連携可能性へと発展 | 交流ができた実感：100%、新たな気づきあり：100%、連携可能性の実感：100%           |
| 現場体験型のイベントの価値        | ラボ見学、学生による実演が高評価。共用研究設備や装置の可視化が交流を促進                |
| 産研への期待               | 学内の研究交流をさらに活性化するための、連携研究の橋渡し役・ハブとして期待               |

【コーディネータより】 異分野研究者間の実質的な交流および研究連携の可能性創出に対し明確な成果を確認できました。特に、参加者全員が「新たな気づき・発見」および「今後の連携可能性」を実感しており、本取組は学内におけるオープン・イノベーション推進の有効な施策として機能していることがわかりました。今後も、本取組を交流から研究連携へとつなぐ機会として継続的に実施していく予定です。

**次回予告** 第2回 研究交流会 & ラボ紹介を **9月**に開催予定です。次回のラボ紹介では、航空宇宙工学をご専門とするシステム工学部の中野教授のご協力のもと、**宇宙推進ロケット工学実験室**の見学を、また、同学部アラム教授による**太陽系宇宙開発プロジェクト**のご紹介をします。さらに、専門家による**宇宙ビジネス**に関するご講演を予定しております(調整中)。国内でもトップクラスの宇宙空間を再現したシステムを有する実験環境にご関心のある方、宇宙ビジネスに興味をお持ちの方は、ぜひご参加ください。詳細は8月初旬にご案内予定です。



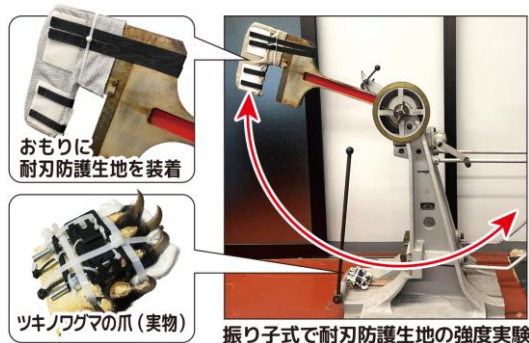
## 産学連携の力で熊対策防護服を開発 — 耐久性実験の共同実施による社会実装の成果 —

京都府八幡市のサクセスプランニング株式会社が、本学システム工学部・榎教授の研究室との共同研究により、熊対策防護服「熊テクター」を開発しました。

### 共同研究のきっかけ

同社は「身を守る商品で社会貢献を」をミッションに、不慮の事故や犯罪から身を守る耐刃仕様の防災防護服をはじめさまざまな防護製品を製造・卸しを行ってきました。

近年、全国的にクマによる人的被害が相次ぐ中、防護装備の必要性が高まっています。こうした社会的課題を背景に、同社はクマ専用の防護服の開発に着手しました。その過程で、「クマの攻撃力を想定した耐久性実験を実施できないか」との相談があり、システム工学部の榎教授が技術的支援を行うこととなりました。



### 耐久性実験

実験では、振り子式の衝撃試験機を用いて、クマが前脚を振り下ろして引っかく動作を想定した荷重を負荷しました。一般的なニット生地と、クマ対策防護服用に開発された生地を装着したおもりを、ツキノワグマの爪を備えた前脚のはく製に向けて振り下ろし、素材へのダメージを比較しました。

実験の計画立案や装置の準備、試験の実施、データの収集・分析には、榎研究室の学生が主体的に参画しました。学生たちは企業担当者と意見交換を重ねながら実験条件の検討や評価に取り組み、実社会の課題解決に向けた研究活動を経験しました。実験の結果、一般的なニット生地は爪による損傷で大きく破れた一方、クマ対策防護服用の生地は表面にわずかな傷が認められる程度であり、高い耐久性を有することが確認されました。これらの実験結果は、防護服の設計改良や性能評価に活用されました。



### 産学連携の成果

本共同研究は、企業が持つ製品開発力と大学が有する実験・評価技術を融合させることで、新たな社会課題の解決につながる製品を創出した事例です。大学で実施した耐久性実験により、防護服の性能を科学的に検証することができ、製品開発の信頼性向上に大きく貢献しました。その後、企業様の方で実際に熊に生地を与えて破れなかったという実証実験も行われたようです。

また、本研究は学生にとっても、企業との共同研究を通じて社会課題の解決に取り組む貴重な学修機会となりました。研究室で培った工学的知識や実験技術を実際の製品開発に応用する経験は、実践的な技術者教育の場としても大きな成果を上げています。

こうして開発された「熊テクター」は、クマ被害対策に従事する自治体職員や一般住民などの安全確保に役立つことが期待されています。本事例は、大学の研究成果や技術的知見を社会実装へとつなげる産学連携の成果であり、地域社会が直面する課題解決に貢献する取り組みとして注目されています。

本取材記事の内容は、6月5日に企画・広報課よりプレスリリースとして発表されました

<https://www.u-presscenter.jp/article/126687>

【コーディネータより】 本共同研究は、防護服製造メーカーであるサクセスプランニング株式会社会長 揚野様より本学に寄せられた一通の書簡を契機として開始されました。揚野様は本学の卒業生であり、これまでも本学の実験室を活用した開発を行われてきました。書簡には、近年社会課題となっている熊による被害への対策に対する期待と、迅速な開発を求める強い思いが記されていました。防護服の製造に伴い取材が増える中、熊の力を想定した耐久性試験の実施についてご相談を受け、本共同研究に至りました。今後も企業の皆様からの一つひとつのご相談に真摯に対応し、課題解決に貢献できるよう取り組んでまいります。